

ふるさと再発見!

vol.

3

ほろほわかやま

HOUBO
WAKAYAMA

FREE

巻頭
特集

世界天文年に 和歌山で 星を 考える

●紀州の歴史・文化
継承される伝統の技

●散策
いにしへの魅力溢れる
和歌浦を散策

●施設紹介
移民資料室を訪ねて
和歌山市出身の移民画家

●NPO・団体紹介
岩倉流古式泳法 / わかやま絵本の会

和歌山は 近畿で一番 星

今年「世界天文年2009」にあたる。今から400年前の1609年にガリレオ・ガリレイが望遠鏡を星空に向けて宇宙探求の扉を開いたのを記念したものだ。和歌山でもさまざまな取り組みが企画されているが、和歌山市立こども科学館の津村光則氏に、星の楽しみ方について、そして、かわべ天文公園の上玉利剛氏には和歌山の星の先人達についてお話を伺った。



世界天文年に和歌山で星を考える¹

津村光則氏

こども科学館 事務長

つむら・みつのり

和歌山市立こども科学館で天文学を専門としている。天体観測やイベント等の活動を通じて、こどもから大人までを対象に星の魅力を伝え続けている。

護摩壇山より撮影／津村氏

が綺麗にみえる ところですよ。

私

たちにとって最も興味深いのは、地球外生命の存在ではないだろうか。

多くの研究者たちが、生命の存在する環境が整っている、地球と同じくらいの年齢の惑星を探し続けているが、

発見には至っていないと津村氏は話す。しかし、観測技術の進歩により、ここ数年で太陽系外惑星が数多く発見されているという。近い将来、地球外生命体の存在を目的の当たりにするかもしれないと考えるところ、ワクワクした気分になるのも星を楽しむ方法の一つ。

「星空をカメラで撮影することも楽しみ方のひとつですよ」と、自身が撮影された星景写真を見せて頂いた。円月島と星を撮影した奥行き深い1

枚。星雲や星団を撮影した専用カメラ。撮影といっても、時にはバーベキューを楽しみながら、時にはコーヒーを片手に…と、実に楽しみ方は無限大である。

星は、人と人をつなぐ役割も担ってくれる。約30年前に、和歌山を事務局とした「星の広場」というグループがあった。全国から各会員が発見した新しい星の情報が続々と事務局に寄せられたという。

1979年に人工衛星が落ちてきた時には、落下場所の測定で大いに力を発揮し、ほうき星の観測等では日本国内での中心的な存在であった。雑誌には間に合わない、新聞には載らない、とにかく新しい情報を集め、調査したこと

空と自然と星の劇場 **かわべ天文公園**



〒649-1443 和歌山県日高郡日高川町和佐2107-1
 【TEL】0738-53-1120
 【開館時間】9:00~21:30
 (ただし平日は18:00まで)

【休園日】月曜日、年末年始
 【入園無料】

<http://cosmo.kawabe.or.jp/>

100cm望遠鏡にプラネタリウム、宿泊施設に
 広い芝広場にたくさんの遊具と、一日を通
 して大人も子どもも楽しめる。

<観望会> 金・土・日・祝日 [19:00~21:00]
 大人300円 子ども200円

星の動物園 **みさと天文台**



〒640-1366 和歌山県海草郡紀美野町松ヶ峯180
 【TEL】073-498-0305
 【開館時間】13:00~17:00
 【休館日】毎週月曜日、火曜日、年末年始
 【入園無料】

<http://www.obs.jp/>

星空ツアーでは、105cm望遠鏡や小型望遠鏡
 を使って天体を観望できる。

<星空ツアー> 毎週木~日曜日、祝日 [19:30~]
 大人200円 子ども100円

和歌山市立 **こども科学館**



〒640-8214 和歌山市寄合町19番地
 【TEL】073-432-0002

【開館時間】9:30~16:30
 【休館日】月曜日、国民の祝日、他。
 【入館料】大人300円・子ども150円

<http://www.city.wakayama.wakayama.jp/kodomo/>
 プラネタリウムが有名。天体観測会、生物観
 測会等も開催している。

<特別展 日食>

9月27日まで。4階特別展示室(入館料のみ必要)

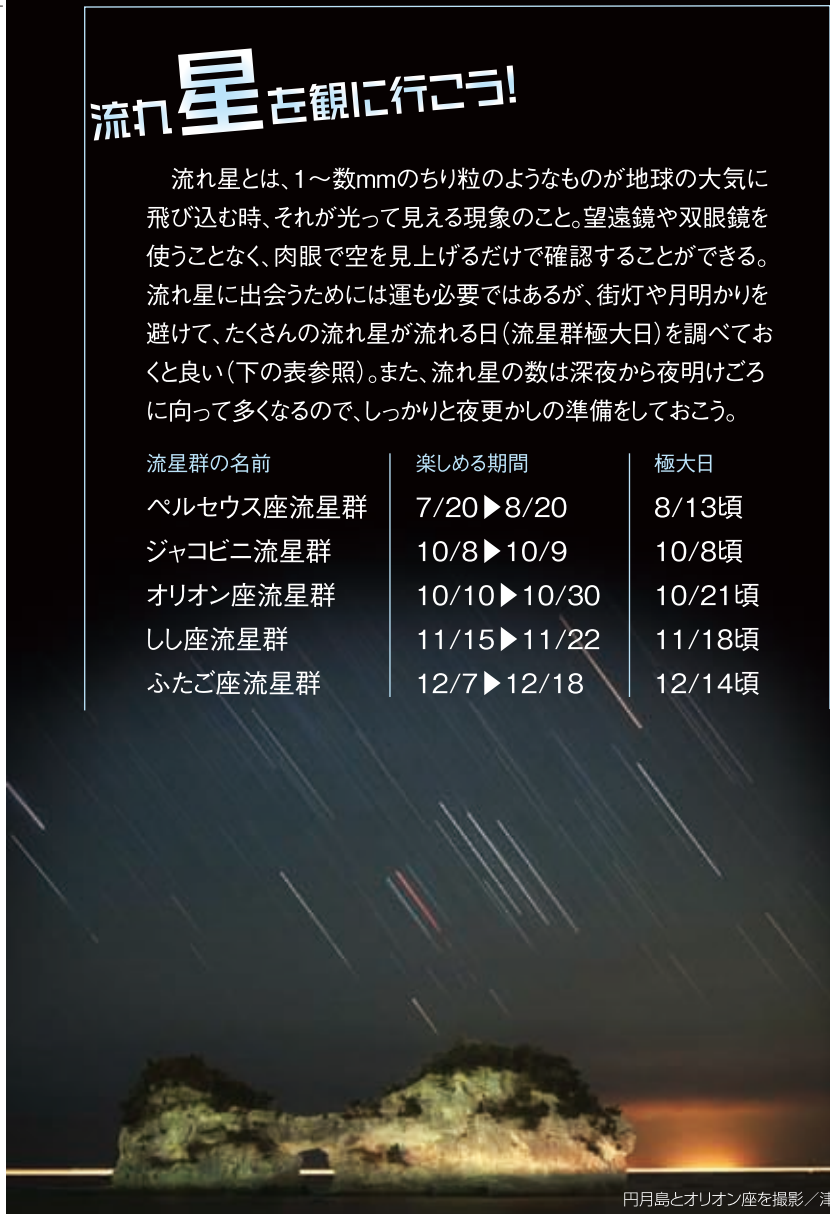
<世界天文年講座> (全5回)

日曜16:30~ 第1回目は8月16日。
 定員先着100人(入館料のみ必要)

流れ星を観に行こう!

流れ星とは、1~数mmのちり粒のようなものが地球の大気に
 飛び込む時、それが光って見える現象のこと。望遠鏡や双眼鏡を
 使うことなく、肉眼で空を見上げるだけで確認することができる。
 流れ星に出会うためには運も必要ではあるが、街灯や月明かりを
 避けて、たくさんの流れ星が流れる日(流星群極大日)を調べてお
 くと良い(下の表参照)。また、流れ星の数は深夜から夜明けごろ
 に向って多くなるので、しっかりと夜更かしの準備をしておこう。

流星群の名前	楽しめる期間	極大日
ペルセウス座流星群	7/20▶8/20	8/13頃
ジャコビニ流星群	10/8▶10/9	10/8頃
オリオン座流星群	10/10▶10/30	10/21頃
しし座流星群	11/15▶11/22	11/18頃
ふたご座流星群	12/7▶12/18	12/14頃



円月島とオリオン座を撮影 / 津村氏

を会員に報告したり、諸外国に
 発表したりという活動を20年
 以上続けていたもので、和歌山
 が星に大きく関わっていたと
 聞くと誇りに思えてくる。
 和歌山は近畿で一番星が綺
 麗に見えるところだと津村氏
 は話す。
 「生石山あたりでも天の川
 が見えますが、護摩壇山あた
 りまで行くとさらに美しい星
 に出会えますよ」とおすす
 めの場所を教えるということが
 できた。ただ、できるだけ街明
 かりから離れることが重要な
 のだそうです。月明かりさえも



星を見るのには邪魔になっ
 しまう。釣り人が魚のよく釣
 れるポイントを探して移動す
 るように、星が綺麗に見える
 ポイントを自分なりに見つけ
 ればよいのだ。
 この機会に星がよく見える
 場所まで車を走らせ、流れ星
 に願いを込めてみてはどうだ
 ろうか。

星

語る、紀州人

和歌山出身。星のトッププランナー達

かわべ天文公園の上玉利剛研究員に、和歌山が輩出した星の先人たちについてお話を伺った。

上 玉利さんはどうして宇宙に関心を持たれたのでしょうか？

『宇宙の何が面白いの？』って子どもたちにもよく聞かれるのですが、『わからんことが多いから面白い』と答えています。わからないことを放っておくのはもったいないと思うんですね。好きな人ができるときに相手のことをわかってみたいと思うでしょ？その気持ちとおなじことですよ。

高校の卒業式で、国語の先生から『本物を見て、本物を知り、そして本物になるう』という言葉を頂きました。しかし宇宙に浮かぶ本物は、私たちの手元には届かないところにあります。だから、さまざまな情報を集めてひとまず納得のいく答えを得て、私たちはそれを皆さんに伝えなければいけません。でも時間が経てば違う答えが導き出されることもあるでしょう。そう考えると、私たちのように宇宙のことを



高城 武夫
(たかぎ たけお)
1909~1982

大阪電気科学館(現大阪市立科学館)を退職後、私財を投じて「和歌山天文館」というプラネタリウムを設立。天文教育に力を注いだ。



小槇 孝二郎
(こまき こうじろう)
1903~1969

全国 300 力所以上にわたる流星観測のネットワーク「日本流星研究会」を組織した流星の研究の第一人者。流星の観測結果や論文は広く海外にも発表された。



畑中 武夫
(はたなか たけお)
1914~1963

日本の電波天文学の開拓者。東京大学教授、東京天文台天体電波部長など歴任。彼の業績を称え、「ハタナカ」と命名された「月のクレーター」や「小惑星」もある。

(敬称略)

—和歌山の天文に関する先人、高城武夫氏はどんな方でしたか？

皆さんに伝える仕事をしている人たちが本物になるには、いくら時間があつても足りないということになります。ものすごく大変なことではあります。それがまた、楽しいんですけどね。

残念ながら、私が和歌山にやって来た時、高城武夫さん

はすでに亡くなられているので、お会いしたことはないのですが、ご家族の方からお借りしたビデオの中で、NHKの番組に出演されている様子を拝見したことがあります。和歌山市内にある正立寺に伝わる渾天儀※

世界天文年に和歌山で星を考える2

上玉利 剛氏
かわべ天文公園 研究員



かみたまり・たけし
和歌山の天文に関する人物・遺跡・伝承などを調査するほか、子どもから大人までを対象にしたプラネタリウム解説等を通じた天文教育にも寄与している。



高城武夫氏の和歌山天文館で、1959～81年まで使用していた金子式プラネタリウム。
(和歌山市立こども科学館で展示中。)

について、地元の小学生にお話をされていたのですが、かなり丁寧に説明をされていたので、『ずいぶんとまじめな方だなあ』という印象を持ちました。

高城さんは、日本で初めてプラネタリウムを設置した大阪電気科学館の天文部主任として活躍された方で、私たちはプラネタリウム解説者にとっては偉大なる先輩です。科学館を退職された後も、私費を投じて「和歌山天文館」というプラネタリウム施設を設立され、閉館した今でも和歌山市内の方だと『水道坂のプラネ

タリウム』として覚えてらっしゃる方も多く、高城さんの目指した天文教育の普及の一端がうかがえます。なお、当時活躍したプラネタリウム機は現在、和歌山市立こども科学館に移設展示されています。当時のことをご存知の方はぜひ、訪れてほしいですね。

ところで、プラネタリウムというものは、高城さんの時代と比べると技術の面ではずいぶん様変わりしてきました。ヒトの眼には見えない星まで映すものやデジタル技術を使ったものも登場しています。でも、その星空のことを話

す、いわば「しゃべり」の部分 はあまり変わっていないんです。もちろん、新しく発見された天体などの情報はどんどん付け加わっていくのですが、「太陽が沈みました。夕焼けが見えています。一番星が見えてきました。」といった流れはそう変わっていない。だから今、高城さんが生きておられたら、技術には驚かれながらも『なんや、なんも変わってへんやないか。』と言われるかもしれませぬ。

—高城さんについて研究されたきうかけは？

先にある方の調査の依頼を受けたのがきっかけでした。その方とは、和歌山を拠点に活躍された流星研究の第一人者で、アマチュア天文家の小楨孝二郎さんと言います。この小楨さんの調査を依頼くださったご家族から「同世代に活躍された方がいる」と紹介

を受けたのが、高城さんだったのです。教員でもあった小楨さんと天文教育の普及を目指した高城さんですから、しばしばお二人の名前が互いの活動記録の中に出てきます。お二人でどんな話を交わされたのだろうと興味をわきましたね。

ところで、お二人の世代にはもう一人、活躍された方がいます。畑中武夫さんです。田辺市や新宮市にゆかりのある方で、東大理学部から現在の

国立天文台へと進んだ根っからの研究者です。実はこの方、電波天文学の第一人者でありながら率先してテレビ出演をするなど、当時の研究者があまり行っていないかつ普及に重点を置いた活動をされました。

この御三方というのは、それぞれ分野で第一人者なんです。和歌山にそんな先人達がいることは、素晴らしいことですね。

※「渾天儀」古代中国の天体研究のための器械。天空の模型として説明に使用された。

「紀州のみかん星」を見よう!

「紀州のみかん星」はもちろん俗称だ。本当の名前はりゅうこつ座の「カノープス」。みかんの季節の深夜から明け方ごろ、神戸あたりから南方を見ると、紀州の山の尾根あたりに一際おおしく輝く星だ。「淡路星」(明石市)「ゲンクロ星」(奈良県川上村)「紀州星」(泉佐野市)などとも呼ばれる。和歌山市雑賀崎では「彼岸星」、日高郡美浜町では「とびあがり星」と呼んだりもするそうだ。

カノープスは南中高度が2～3度と低く、水平線まで晴れ渡っているときにしか見ることができないため、「紀州みかん星を見ると長生きする」とも言い伝えられている。

かわべ天文公園からも見えるので、一度、紀州みかん星を観察するために宿泊してみてもどうだろう。

護摩壇山よりカノープスを撮影／津村氏

和歌山の伝統工芸品 紀州箆筒

継承される

伝統の技

江戸時代に始まり、今日も品質・デザインともに高い評価を受けている伝統工芸品・紀州箆筒。その製造現場にお邪魔し、紀州桐箆筒協同組合理事長の上中喜代司氏にお話を伺った。上中氏は紀州箆筒が伝統工芸品の指定をうけるために大変苦労された方であり、現在も伝統技術を絶やさぬよう尽力されている。

苦境に
立たされた
紀州桐箆筒

和歌山市での箆筒作りの起源は定かではないが、江戸時代末期には製造技術が確立し、明治時代には大阪圏の需要を満たす産地に成長した。特に明治34年に南海鉄道が開通し、大阪への貨物輸送が可能になったことで、紀州箆筒業界は急速に発展した。

しかし戦後の大型家具製造は大量生産による安価なものが主流となり、手作りの紀州桐箆筒は徐々に市場を失っていった。さらに道路、鉄道網の発達で広島、九州方面の家具産地が大阪商圏に進出し始めた。とうとう昭和50年代には大阪圏でのシェアが逆転され、和歌山の箆筒業界は苦境に立たされた。



上中喜代司氏
(うえなか きよじ)

昭和8年生まれ。昭和23年より、紀州桐箆筒の職人として活躍。現在、紀州桐箆筒協同組合理事長／和歌山富士木工株式会社代表取締役。伝統工芸士／和歌山県名匠。平成16年旭日雙光章を受賞。全国ファニチャーコンクールで、昭和62年、平成元年に通産大臣賞(グランプリ)、昭和63年に中小企業庁長官賞、平成3年に科学技術庁長官賞を受賞。



桐箆筒は外気に合わせて除湿と加湿をする性質を併せもち、衣類の保存に適している。火災の際には水を吸って燃えにくく、身を焼いても中身を救うといわれている。

「和歌山は地の利があることにあぐらをかいてたんや」

上中氏はこのままでは紀州筆筒は廃れてしまうと強い危機感をもち、紀州筆筒のブランドの確立に尽力された。「大阪への地の利のよさだけでは他の産地に対抗できない」。通商産業大臣（現在の経済産業大臣）が指定する「伝統工芸品」の認定をめざして、昭和60年に紀州桐筆筒協同組合を設立した。

認定を受けるには色々なハードルがあったが、一番苦労したのが伝統産業として100年以上の歴史を立証することだったという。申請から3年以内にこれを証明しなければならぬ。県内各地を回って資料集めの日々を重ねたが、決め手となるものがないままだった。

う。曾和家から発見された古文書で、紀州筆筒はすでに天保年間には、武家以外の人々にも広く婚礼調度品として使われたことがわかった。これが決め手となり、ついに紀州筆筒は昭和62年に伝統工芸品に認定された。

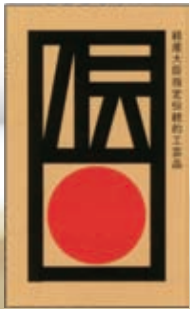
ブランド確立に成功した紀州筆筒は、「近畿で通用すれば全国で通用する」といわれる大阪、京都、兵庫など大阪商圏の目の肥えたお客に受け入れられていく。昭和62年と平成元年には、全国フアニチャーコンクールで通産大臣賞（グランプリ）を受賞し、高島屋などの有名デパートにも製品を卸すようになった。全国的にも「和家具」といえば和歌山の桐筆筒」と、紀

紀州筆筒は全国ブランドに



州筆筒の品質とデザインは一目置かれる存在となったのである。

平成18年には紀州筆筒の地域団体商標登録を行い、独自ブランドの技術・技法を守ること業界の発展をめざしている。



伝統工芸品マーク

「常に手間を惜しんではいけない。職人は一生勉強」

紀州桐筆筒の製造工程は、挽き、削り、継ぎなど、匠たちの経験とカンによる手仕事だ。寸分違わない匠の腕には驚かされる。筆筒の引き出しを押し込むと、別の引き出しが空気に押されて出てくる。衣類の保存に最適な、この密閉性は機械では実現できない。

平成2年に和歌山県名匠に選出され、現在は名匠の選出委員にも任命されている。和歌山県には紀州筆筒以外にも伝統的な工芸品が多く、これらの他業種の発展にも貢献されている。

上中氏は、和歌山が誇る伝統工芸品の技術・技法を後世に残すために余念がない。弟子を何人も伝統工芸士に育てあげ、後継者に不安はないという。

仕事に対する信念は「常に手間をおしまぬこと」だ。職人は一生勉強、この職人魂は後世にも必ず受け継がれていくことだろう。

いとしへの魅力溢れる和歌浦を散策

若の浦に 潮満ち来れば 瀉を無み

葦辺をさして 鶴鳴き渡る

これは、聖武天皇が行幸の際、お供の山部赤人が詠んだ「万葉集」巻六の九一九にある歌。現在の「片男波」の地名は、この歌の「瀉を無み」から生まれたと言われている。

このように、いにしへの時代からそのあまりにも美しい風景と海岸美で人々の心を引きつけてきた場所、「和歌浦」は、多くの人々がここを訪れ、様々な歴史を育んできた。

今回の散策道紹介は、この美しい風景と歴史に触れてみたい。

現在の和歌浦は、「和歌浦」、「新和歌浦」、「奥和歌浦」に分けて呼ばれている。和歌浦は万葉の時代から親しまれ、玉津島神社・東照宮・天満宮の三社がある聖地。新和歌浦は森田庄兵衛が明治42年に私財を投入し造ったトンネル等により発展した。奥和歌浦は主に戦後、旅館やホテルが整備され発展した雑賀崎方面を指す。

歴史と景観美に

触れながら楽しめる

散策コース

東照宮・天満宮・玉津島神社で和歌浦の歴史に触れ、妹背山・片男波で美しい風景を楽しむ。景観の変化が豊かで、散策人を飽きさせない起伏に富んだコースである。和歌浦の風景を一望できる奠供山や鏡山の山頂など、コースの至る所で見られる和歌浦の美しい風景が、散策人の心を癒してくれる。

訪れる人にとって やさしい和歌浦を 今も目指して

万葉集に親しまれて詠まれた場所だけに、歴史を解説した案内板や、歌碑（歌を彫り込んだ石碑）が豊富にあるのも特徴だ。また、あしべ通りには和歌浦にちなんだ歌や水墨画が描かれたプレートがあるなど、散策人を楽しませる工夫が随所に見られる。

紀勢線が整備される以前、この和歌浦湾から新宮に船便

が出ていたという。また、かつて日本初の野外展望エレベータが奠供山に存在し、あの夏目漱石も訪れていたという。

近年は、和歌浦を訪れる人にとって、より分かりやすい環境を提供しようとする動きがある。和歌山市が不老橋側に設置した「和歌の浦観光案内マップ」や、和歌の浦みちしるべの会の皆さんによる標識設置運動などがそれだ。

コースにある案内板や歌碑は、散策人をいにしへの和歌の浦へ誘ってくれる一助になるだろう。天候の良い日は、海の対岸に見える山の稜線が美しい。是非、晴れた日に訪れて、心地よい潮風に包まれるがら歩いてみてはいかがだろうか？

和歌浦の水先案内人

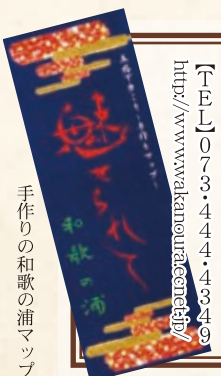
「和歌浦に初めて来た観光客からよく道を聞かれる：和歌浦の観光が抱える問題、その一つが街の案内板や看板の不足だ。この問題を解決しよう」と立ち上がったのが、和歌浦の観光協会や市民団体などが集まって結成されたボランティア団体「和歌の浦みちしるべの会」だ。

路面電車が和歌浦にあった時代は、和歌山駅などからのアクセスはよかった。現在はバスや車でのアクセスが中心だが、バス停や駐車場からの案内板が、まだまだ不足しているのが現状。そこでメンバーで問題点を話し合い、和歌山市など行政と協力しながら現在は試作の標識を東照宮・天満宮など数ヶ所に建てるまでに至った。標識だけでなく、観光に関することなら電話でも気軽に受け付けてくれる。

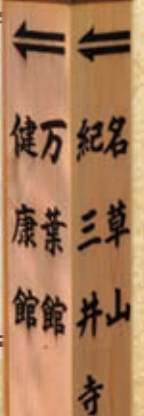
《お問い合わせ》

和歌の浦みちしるべの会
(和歌の浦観光協会)

TEL) 073-4444-4349
http://www.wakainouchi.com/



手作りの和歌の浦マップ





③ 和歌浦天満宮
【学問の神様】
祭神は菅原道真。本殿・楼門等は国の重要文化財。合格祈願に訪れる受験生が多く、地域の氏神でもある。



① 御手洗池公園



⑤ (上) 玉津島神社
万葉歌人の信仰を集めた神社。明光浦の御霊、衣通姫など女神三神が祀られる。
(左) 袖掛の塀
小野小町が、愛しい人への思いを募らせながら、着物の袖をこの塀に掛けていたと言い伝えられている。
(右) 根上り松
和歌山市高松より移転。戦時中には「松根油」の原料として使われた。

■交通アクセス

- バス/JR和歌山駅より約25分
2番乗り口新和歌浦行き 権現前下車
- 南海和歌山市駅より約25分
9番乗り口新和歌浦行き 権現前下車



② 紀州東照宮
【関西の日光と呼ばれる神社】
祭神は家康公。本殿・拜殿・楼門などは国の重要文化財。和歌祭は東照宮創建から続く祭礼。



④ あしべ通り
川沿いの塀に「和歌の浦十三景観」のプレートがあり、和歌浦の景色と共に楽しませてくれる。



⑥ 奠供山山頂
眺望の良い奠供山は神事の道具を供えた場所。



⑦ 妹背山 海禅院多宝塔
【和歌山最古の石橋を渡って行く】
題目碑や、十五万個の経石を収めた文化財「多宝塔」がある。一対の題目碑がある事から夫婦の古称「妹背」が山名となった。



⑧ 不老橋
【和歌浦のシンボリックなアーチ式石橋】
紀州徳川家10代藩主 治宝公が隠居後、東照宮御旅所への御成道に築造。不老不死の願いがこもる。

⑨ 和歌浦干潟
【万葉歌人にも愛された雄大な景観】
片手をふる蟹「シオマネキ」など稀少生物が生息する重要な干潟(環境省指定)。近年まで有名な海苔の産地であった。



⑩ 万葉館
【万葉集の歌世界】
和歌山を旅した歌 107首を絵地図に表した紀伊万葉巡りなど、万葉の世界を身近に感じることができる。

片男波公園

⑪ 片男波公園
【昭和天皇御在位六十年記念公園】
日本を代表する砂州。日本庭園、万葉歌碑、野外ステージや環境省「快水浴場百選」の特選に選ばれたビーチがある。赤人が詠んだ和歌の一篇からついた地名。



片男波 歌碑
片男波公園内に6ヶ所、設置されている。



先人の足跡 移民資料室を訪ねて

— 和歌山市民図書館 —

遠くない昔に現代とは違う遠い海の方こうへ渡った人々がいた。歴史の表に出ることはないが、決して忘れてはならない記憶である。そんな「移民」達の歴史を守り、今に伝え続けている場所がある。そこには、21世紀にもなお輝く先人達の足跡があった。

今

ではすっかり当たり前になっていく「市民のための開かれた図書館」。その走りとして、1981年に開館した和歌山市民図書館。その3階に移民資料室は設置されている。移民県である和歌



ブラジル移民促進ポスター（昭和初期）
「資金約八百圓で直に二十五町歩の地主となる安住の理想郷へ行け！」とある（和歌山市民図書館蔵）

設立と現在の役割

設立当初は約4000冊だった資料も、現在は約8000冊を超える。100年以上の冊を重ねた書物も多く、しっかり倉庫に保管されていてもおかしくないものばかりだが、実際に手に取り読んで欲しいとの配慮から、そのほとんどが新しい本などと肩を並べ本棚におかれている。

全国初の移民資料室だけに、設立当初は蔵書の整理方法に苦労し、職員で議論を重ね模索した。本のタイトルだけでは、内容が伝わりづらいと思い、1つ1つの資料に目を通して、データベースを作成した。その作業は2年半におよんだ。司書の中谷智樹さんは静かな物腰で話してくれた。

「資料室を利用される方は、

研究者だけではなく、様々な方がいます。

この資料室で知人の居住先を探し出し、現地で数十年ぶりに再会を果たした方もいらつしました。

現在では移民に関心を持ち研究をする方はずいぶん増えました。私たちの仕事はそれらの研究が進むように適切な資料を提供することです」。

ヘンリー杉本氏の絵

資料室へ続く廊下や壁には、数十枚もの絵画が飾られている。

「この資料室で展示している絵画は、ヘンリー杉本さんが戦時中に日系人強制疎開命令を受け、収容所内で描かれた記録絵画なんです。収容所内での過酷な生活がわかる大変貴重なもので、ヘンリーさんが1980年に国内各地で初めて巡回展示した絵画を、この資料室に寄贈いただいたものなんですよ」。

移民の歴史は

人権の歴史

最後に中谷さんは、移民への想いを語ってくれた。

「全く文化の異なる人間が、移民先で受け入れられるには、長い年月と相当の努力が必要だったと思います。現在では多くの日系2世、3世の方が、逆に日本に移住しています。私達とよく似た顔をしているが、異なる言語、文化を持つ人々。人権を尊重し彼らを理解していくために、移民について多くの方に知ってもらえればと思います」。

和歌山市出身の移民画家
ヘンリー杉本



ヘンリー杉本(本名ニ杉本讓)氏は1900年、現在の和歌山市に生まれる。19歳で渡米。画家を志し、パリに留学後、1931年新人の登竜門であるサロン・ドートンヌに入選する。翌年帰米し、パリで認められた日本人画家としてアメリカでの地位を固めていった。

しかし、太平洋戦争が始まると日系人の強制収容が始まり、収容所生活を強いられた。密かに持ち込んだ画材で、シーツをキャンバスに、収容所での日系人の生活を描き続けた。この一連の絵画は貴重な歴史的記録絵画として注目を浴び、米国スミソニアン博物館や東京国立近代美術館に永久保存されている。戦後も米国内を中心に活躍し、1990年にニューヨークで90歳で逝去した。

和歌山市民図書館および和歌山市庁舎で同氏の作品に出会うことができる。



①『共に堪え忍ぼう』



②『土曜日の午後』



③『洗濯場』

①～③の画は収容所内での人々の生活をキャンバスの代用品としてシーツに描いた作品である。厳しい状況の中でも皆が助け合い暮らしていたことがうかがえる。

(和歌山市民図書館蔵)



『クロイスターよりワシントン橋を望む』

この作品は、昭和51年(1976)和歌山市新庁舎落成記念に制作・寄贈された。(和歌山市役所1階にて展示)

和歌山で移民展が開催されます

和歌山から北米への移民

—太地町を中心に— (仮題)

和歌山大学 紀州経済史文化史研究所 特別展

日程 平成21年11月16日(月)～12月18日(金)

場所 和歌山大学内 付属図書館3階
紀州経済史文化史研究所

お問合せ先 紀州経済史文化史研究所
073-457-7891

<http://www.wakayama-u.ac.jp/kisyuken/index.cgi>

移民資料室INFO



場所 和歌山市湊本町3丁目1番地
和歌山市民図書館3階
(2階のレファレンスカウンターにて受付)

電話 073-432-0010

http://www.lib.city.wakayama.wakayama.jp/wkclub_doc/imin-top.htm

交通 南海電鉄和歌山市駅から西へ徒歩5分

開室時間 10時～17時30分

休館日 市民図書館の休館日と同じ

岩倉流泳法 江戸時代の泳法を 今に伝える

宝永七(1710)年から和歌山にて泳法の伝承を始めて以来、今年で300年という岩倉流泳法は、紀州五代藩主徳川吉宗公が家臣の岩倉郷助重昌に藩士の水芸指南を命じたことを起源としている。

(財)日本水泳連盟では日本泳法のうち、12の流派を公認しているが、その一つだ。

泳法は、平泳、立泳、水入を基本に、抜き、鯨泳、虫泳、浮身、太刀泳、瓜剥などの他、跳飛術を特技とする。



水中発砲



甲冑泳



花傘行列

また昭和46年、第26回黒潮国体に岩倉流の集大成として大旗を先頭に甲冑、刀、弓、槍、鉄砲などを持つた者が後に続く御旗奉行や花傘行列などの団体泳法を披露した。

昭和40年に和歌山県指定無形文化財に認定される。

平成17年にNPO法人WISCが設立され岩倉流泳法を「和歌山の泳ぎの文化」と活動している。



鯉飛【いなとび】

岩倉流和歌山水練学校

- 秋葉山プール 7~8月中旬(15日間) 4歳以上(初心者から上級者向け)
- 県開発センタープール 10月~翌年5月 毎週日曜日 基礎が出来ている人
- 8月9日に秋葉山で公開演技があります。

お問い合わせ TEL 073-423-5543(那須) FAX 073-423-5546 <http://iwakuraryu.web.fc2.com/>

わかやま絵本の会

今年で創立24年を迎える、「わかやま絵本の会」。子どもたちに和歌山を好きになって欲しいとの思いから、歴史・文化を扱った温かみのある絵本やわかりやすい文庫本を発刊している。著者である松下千恵さん自身の、綿密な調査や史実に基づいた内容に子ども達に限らず、県内外の歴史愛好家から人気を博している。新刊もぞくぞく発売されており、県立博物館や、県内の観光施設、書店等で入手することができる。



『ぼんたとごんたのおつきみ』作・くりはらとね

わかやま絵本の会

お問い合わせ
TEL.073-452-4341
FAX.073-452-4345

わかやま絵本の会

和歌山県立図書館主催の紙芝居コンクールに出品し、入賞したものを絵本化した。「読んじゃってシリーズ」の第一弾。有田川町に伝わるお月見の風習にヒントを得た創作絵本である。また英訳も付けており、親しみやすいイラストで楽しめる。「ぼんたとごんたのおつきみ」は、今号記載の星や天体などと合わせても楽しめる内容になっている。



編集後記

歴史と文化の情報誌「ほうぼ わかやま」第3号は、「星」を巻頭で特集しました。取材を通して、和歌山は近畿でも有数の星の名所だと教えて頂きました。誇らしいことですね。この夏、そして、秋の夜長に、せっかくの恵まれた環境を読者のみなさんにも大いに体験して頂きたいと願い、この企画をお届けします。ぜひ、故郷と宇宙のつながりを再発見して頂ければ幸いです。

また、6・7面では和歌山が誇る伝統工芸の「紀州筆筒」を、8・9面では「万葉の道」として和歌浦の散策の楽しみ方を、10・11面では和歌山市立図書館内の「移民資料館」と移民画家の「ヘンリー杉本」さんについて、そして、最終

面では紀州が生んだ「岩倉流泳法」と「わかやま絵本の会」の活動を紹介しました。さまざまな分野で、いろんな方々が、その生きざまを通して和歌山の「歴史」と「文化」を育ててくれているんだと実感し、うれしくなります。

この「ほうぼ」も、雑誌という媒体を通して、ふるさと育ての一助を担わせて頂いていることに感謝しながら、次号へとつなげていきたいと思っております。今後ともぜひご愛読下さい。

第3号編集長 岡 京子